

# St. Luke's International University Repository

## HAS看護学生弁論大会の軌跡 - 「創める」ことの意義 -

|       |                                                                                                                                                                |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2009-03-31<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En): nursing students, speech contest, healthcare<br>作成者: 高畠, 有理子, 芹澤, 沙弥佳<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10285/2812">http://hdl.handle.net/10285/2812</a>                                                                                |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



報 告

# HAS看護学生弁論大会の軌跡

## —「創める」ことの意義—

高島有理子<sup>1)</sup> 芹澤沙弥佳<sup>2)</sup>

### Tracking the HAS (Healthcare Association of Students) Speech Contest for Nursing Students : The True Meaning of Its “Creation”

Yuriko TAKABATAKE, RN<sup>1)</sup> Sayaka SERIZAWA<sup>2)</sup>

#### 〔Abstract〕

Despite being held in Tokyo annually for 13 years from 1993 to 2005, the HAS (Healthcare Association of Students) speech contest for nursing students was discontinued in 2006 because of a lack of participation. Including the final year in 2006, contest management committees performed their duties with originality and independently from each other over the years. The administrative process is described from the standpoints of the first committee representatives and the final management committee members. The number of committee members gradually decreased until there were only a few students involved in managing the 2006 contest. Since there also was only one student applicant that year, a decision was made to cancel the 2006 speech contest. It wasn't the establishment of the contest, but rather its continuing administration by student committee members that gave the speech contest its true meaning.

〔Key words〕 nursing students, speech contest, healthcare

#### 〔要 旨〕

1993年から2006年までの13年間にわたり看護学生が中心となって運営し、東京都内において計13回開催されたHAS看護学生弁論大会が幕を閉じた。未開催だった第14回大会を含め、各運営委員会は主体的に、かつ独自に趣向を凝らして熱心に活動した。その内容を第1回大会代表および第14回大会運営委員の立場から述べる。

第1回大会の運営委員は35名であったが、回を重ねるにつれて委員数が減少していった。第14回大会では、少人数運営の問題に加えて弁論応募者数が1名であったことから大会の開催を中止した。その経緯について説明する。

13年間の経過をふまえたうえで、大会の開催そのものを運営委員会の成果とみなすのではなく、各委員会が運営を「創める」こと自体に本大会の重要な意義があると結論する。

〔キーワード〕 看護学生、弁論大会、ヘルスケア

1) 明治学院大学大学院社会学研究科社会学専攻博士前期課程 Meiji Gakuin University Graduate School of Sociology

2) 聖路加看護大学 St. Luke's College of Nursing

## I. はじめに

まさに世紀をまたいで、看護学生手作りの看護学生弁論大会が、1993 年から 2006 年までの 13 年間にわたり計 13 回開催された。本稿は、1993 年第 1 回大会運営委員会の代表であった高畠と、その終幕となる未開催の 2006 年第 14 回大会運営委員の芹澤が、本大会の軌跡を各自の立場から運営委員会の活動に焦点をあてて振り返るものである。

本来、計 13 回の大会と第 14 回大会運営委員会の軌跡を述べるというのであれば、各回の運営委員会が個々に「それぞれの軌跡」を述べるべきであろう。なぜなら、各回の運営委員会は独立した組織として、いわば「単体」として存在したからである。HAS 看護学生弁論大会の特徴は、それぞれの大会運営のあり方や開催趣旨があくまでも各回のメンバーの間で独自に検討されてきたことにあると考える。唯一つないできたものは、看護学生（正しくはヘルスケアを学ぶ学生：看護学生に限らない）の問題関心を、「弁論」を通して世間に伝えるという形式をとったことくらいではないだろうか。過去の運営形態にとらわれない自由な姿が個々の大会にみられた。その証しは、各回の大会テーマ設定（表 1 参照）やパンフレットに認められる。その回を開催するために集まった学生たちが十分に議論を尽くして目標に向かって進むという営みのスタートライン——学生が主体的な運営を「創める」ということ——それ自体に重要な意義を見出すことができるのだ。まさにそのような運営委員会が 1993 年から 2006 年にわたり看護界に存在していたことを、高畠は第 1 回から第 13 回までの大会（やむを得ず出席できなかった第 10 回を除く）を見てきた限りの立場において、芹澤は第 14 回大会運営に最後までかかわりその終幕を見とどけた立場から述べるものである（共著者がそれぞれ異なる立場から述べるのが重要であると考えたため、芹澤は第 IV・V 章を、それ以外の章を高畠が担当した）。

さらに冒頭で述べておきたいことは、回を重ねるなかで他学校の学生が運営に参画し、運営幹部として重要な役割を担うなど、本大会の運営が一大学の取り組みを超えて展開していたことである。その活動は大会を開催するだけでなく、ヘルスケアに関わる諸問題について主体的に勉強会を開き、他の医療系学生組織との交流をもつなど、大変豊かなものであった。

本大会は聖路加看護大学の学生の手によって産声を上げたが、その後は学校間の垣根などやすやすと越えて、ヘルスケアを学ぶ多くの学生が大会の成長に貢献したことを特に強調しておきたい。

## II. 第 1 回全国看護学生弁論大会の開催

### 1. 第 1 回大会運営委員会の発足

筆者が聖路加看護大学（Class of 1994）の学部 3 年生であった当時にさかのぼろう。1992 年の白楊祭（文化祭）でのことだ。クラスメート有志数名が集まり、「看護婦の社会的地位を考える」というテーマで議論し、結果をポスターにまとめて掲示した。今振り返ればあの白楊祭が本大会への布石であったように思う。当時の看護師の厳しい労働実態を表現する言葉に、3K・10K という俗称があった（現在でもメディアで目にするものだ）。3K とは「きつい、汚い、危険」という言葉の頭の音をとった言葉である。10K にはたとえばこのようなことを含めていたようだ。「給料安い、彼氏できない、結婚できない、子ども産めない、腰が弱くなる、帰れない、化粧のノリが悪い、規則が厳しい、休暇がとれない」。

このような社会における看護師のイメージやその低い社会的地位に対して疑問を感じ、学んでいた看護の価値が世間に伝わっていないと私たちは考えていた。そこで白楊祭という機会を得て問題提起を行ったのだ。大学旧校舎の小さなグループワーク用の教室で、長時間にわたって議論を続けたあの日の光景はいまだに鮮明である。

それからほどなくして、筆者は看護学生弁論大会を開催することを思いつき、クラスメートに運営委員を募る用紙を回覧した。名乗り出たのは 33 名。運営組織に委員として名を連ねることはなかったクラスメートも随時手を貸してくれた。総勢 55 名ほどのクラスメートの多くが参加してくれたのだ。その意味では、Class of 1994 全体で取り組んだ活動であったともいえるだろう。

第 1 回の運営委員会議事録が残っている。日付は 1992 年 11 月 30 日。委員長、副委員長、書記部、会計部、渉外部、広報部、会場設定部と役割分担を行い運営を開始した。放課後の教室利用や大学への郵送物・連絡等が発生することが想定されたため、当時学生部を担当していた岩井郁子教授（当時）に大会運営について報告し、教室利用等についてお願いした。その場で岩井教授が顧問を引き受けてくださり、さっとお財布を手にとって「何かというでしょう」と寄付をくださった。なんて幸先のよいスタートだろうと委員一同感激した出来事だった。また、菊田文夫准教授も顧問としてさまざまな場面でご協力くださることになり、大会当日はマイカーを出してくださるなど折に触れて運営委員をサポートしてくださった。

### 2. 第 1 回大会開催までの道のり

そのほか、聖路加看護大学の先生方・事務の方々からの数多くのエールをいただき、無鉄砲な筆者たちの試みは徐々に軌道に乗り出した。まずは、スポンサー探しに

表1 HAS 看護学生弁論大会 開催日・開催地・大会テーマ・ゲスト一覧

| 開催日・開催地                                  | 大会テーマおよびゲスト（敬称略・50音順）                                                                                                        |
|------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1993年10月3日<br>科学技術館サイエンスホール<br>（東京都千代田区） | 第1回<br>テーマ<br>「全国看護学生弁論大会 ―たまご達の革命―<br>看護学生の語る看護とは」<br>ゲスト<br>黒岩祐治, 日野原重明, 宮子あずさ                                             |
| 1994年10月9日<br>科学技術館サイエンスホール<br>（東京都千代田区） | 第2回<br>テーマ<br>「全国看護学生弁論大会 ―たまご達の革命―<br>魅力ある専門職『看護』 ～今, みつめる力を持って～」<br>ゲスト<br>黒岩祐治, 樋口康子, 日野原重明, 宮子あずさ                        |
| 1996年3月20日<br>両国公会堂<br>（東京都墨田区）          | 第3回<br>テーマ<br>HAS 保健・医療・福祉学生弁論大会<br>「共に支えあう社会を目ざして ～今, 私達にできることは～」<br>ゲスト<br>川越博美, 黒岩祐治, 日野原重明                               |
| 1996年11月10日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）     | 第4回<br>テーマ<br>HAS 「介護」を考える学生弁論大会<br>「『介護』を考える学生弁論大会 ～今だから, 私たちだから～」<br>ゲスト<br>黒岩祐治, 徳見康子, 日野原重明, 山崎摩耶                        |
| 1997年11月23日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）     | 第5回<br>テーマ<br>HAS ヘルスケアを考える学生弁論大会 ～たまごたちの革命～<br>「患者主体の医療・福祉とは～あなたの・わたしの問題として,<br>ともに考えよう～」<br>ゲスト<br>逸見晴恵, 黒岩祐治, 辻本好子, 日野原重明 |
| 1998年11月23日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）     | 第6回<br>テーマ<br>HAS 看護学生弁論大会<br>「理想のナースを考える ～今, たまごたちが目指すもの～」<br>ゲスト<br>黒岩祐治, 日野原重明, 宮内美沙子, 村松静子                               |
| 1999年11月21日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）     | 第7回<br>テーマ<br>HAS 看護学生弁論大会<br>「たまご達の提言『看護の未来を考える』<br>～一生ナースを続けますか?～」<br>ゲスト<br>川嶋みどり, 黒岩祐治, 小林光恵, 日野原重明                      |
| 2000年11月23日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）     | 第8回<br>テーマ<br>HAS 看護学生弁論大会<br>「最近の医療ニュースを見て思うこと」<br>ゲスト<br>井部俊子, 黒岩祐治, 日野原重明                                                 |
| 2001年11月25日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）     | 第9回<br>テーマ<br>HAS 看護学生弁論大会<br>「健康に死ぬとは ～健康ってなに?～」<br>ゲスト<br>黒岩祐治, 日野原重明                                                      |
| 2002年12月1日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）      | 第10回<br>テーマ<br>HAS看護学生弁論大会<br>「先端医療の光と影 ～私たちはどう向き合うか～」<br>ゲスト<br>黒岩祐治, 日野原重明                                                 |
| 2004年1月11日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）      | 第11回<br>テーマ<br>HAS看護学生弁論大会<br>「看護学生が考える看護とは? ～看護ってなに?～」<br>ゲスト<br>黒岩祐治, 日野原重明                                                |
| 2004年12月19日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）     | 第12回<br>テーマ<br>HAS看護学生弁論大会<br>「これが私の生きる道」<br>ゲスト<br>井原泰男, 黒岩祐治, 宮子あずさ                                                        |
| 2006年1月15日<br>聖路加看護大学講堂<br>（東京都中央区）      | 第13回<br>テーマ<br>HAS看護学生弁論大会<br>「いのち」～看護学生の視点から～<br>ゲスト<br>川嶋みどり, 黒岩祐治, 日野原重明                                                  |
| 2006年12月10日<br>未開催                       | 第14回<br>テーマ<br>HAS看護学生弁論大会<br>「LIFE～日々学んでいる中で感じること～」<br>ゲスト<br>黒岩祐治, 日野原重明, 宮子あずさ                                            |

参考: HAS 看護学生弁論大会ホームページ (第13回大会運営委員作成) より一部改変  
<http://www.geocities.co.jp/Beautycare/6186/index.htm> (2008年10月末時点)

必要な「企画書」作成にとりかかった。企画書というのが何なのかまったく知らなかったので、企業のマニュアル本を手にとって勉強した。同時にフジテレビの黒岩祐治キャスターに運営への協力をお願いするファックスを送った。黒岩氏は准看護師問題をテレビで取り上げ、看護師のドキュメンタリー番組をプロデュースされるなど看護界に精通された方で、救急救命士法制定の立役者となられていた。そこでこの大会の意義についても理解してくださるのではないかという期待をもったのだ。黒岩氏はその思いを汲んでくださり、すぐに了解の返信をいただいた。返信は大学事務宛のファックスで届いた。その知らせをすぐに委員に届けようと、事務の方が急いで筆者を探してくださった。校内放送などない時代であ

る。委員一同歓喜に沸いたのはいうまでもない。目に熱いものを光らせる人もいた。黒岩氏からの協力快諾の知らせと、それを急ぎ委員の手元に届けてくださった事務の方の気持ちとに筆者も胸が熱くなった。頼りない運営委員を勇気づけてくださった多くの人々の存在がなければ、この大会が開かれることはなかっただろう。

第1回大会の企画は次のような内容であった。

---

〔第1回全国看護学生弁論大会 企画書（概要）〕

このたび、看護学を学ぶ私たちが、日本の看護界を担う一員として看護・医療について考え、論理的に表現する力を高める機会を設けたいと思い、この大会を企画致しました。さらに、この大会で看護のあり方を広く社会

に訴えていきたいと考えています。

社会における看護職のイメージは固定化しています。「白衣の天使」は看護職の代名詞のように用いられ、その実態は、3K、10K といった言葉で表されています。

何故、こうまでもイメージが固定化しているのでしょうか。看護職が自分たちに対する社会のイメージを変えるに足る影響力を持っていないことにその一因があると考えます。さらに、影響力を持っていないのは、論理的思考力や表現能力の乏しさに起因すると思われます。こういった能力は、学生時代に修得することが望ましいと考えました。そこで論理性や表現能力が必要とされる“弁論”を通じ、自らの声をもって看護を社会にアピールすることが可能となることを期待してこの大会を企画しました。

また、看護学生が看護・医療をどのように見つめているのかということを社会に訴えるということには大きな意味があると考えます。看護学生は、当然のことながら看護職ではありません。その「たまご」です。社会の人々よりは看護に近く、看護職よりは看護に遠い存在だと言えます。従い、社会に対して「看護」をアピールするにあたり、社会の人々と看護職間の問題や看護の未来像などを、客観的に捉えやすい立場にいるのが看護学生なのです。

現在の日本において看護学生の全国組織はありません。私たちは、「初めて」開催されるこの看護学生の弁論大会を定期的に継続していくものに育てていきたいと考えています。かなりの時間や経費を要すると思われます。しかし、看護学生が自ら主催することに意味はあり、たとえ時間がかかり経費がかさんだとしても、運営委員会を全国規模に拡大することが本大会の目指すところです。

**企画名：**全国看護学生弁論大会～たまご達の革命～

**企画立案者：**全国看護学生弁論大会運営委員会（聖路加看護大学3年生有志33名）

**日時：**1993年10月3日（日）10時半～16時

**会場：**東京都千代田区 科学技術館サイエンスホール（410名収容）

**対象：**弁論参加対象者＝全国の看護学生15名

**ゲスト：**黒岩 祐治氏（フジテレビ報道キャスター）  
日野原重明氏（聖路加看護大学学長・聖路加国際病院院長）  
宮子あずさ氏（看護婦・作家）

**予算：**150万円

**内容：**

- 1) 弁論者は1名10分間で以下のテーマの弁論を行う。  
弁論テーマ「看護学生が語る看護とは」  
看護職の社会的地位、看護教育制度、これからの看護等、関心のある事柄について自由に論じてもらう。タイトルは自由。
- 2) ゲストによる講評

**弁論者の選出方法：**全国の看護学校約1300校へ応募案内を送付。参加希望者は弁論内容を10分間に吹き込んだカセットテープ及び弁論内容の要旨（800字～1200字にまとめたもの）を運営委員会に送付。運営委員が審査を行い応募者の中から15名を選出する。

以上が長時間に及んだ激しい議論と黒岩祐治氏や顧問他からのアドバイスを経て決定した最終的な企画書からの抜粋である。重視したのは、誰に向けての弁論なのかという点だ。弁論を聞いてほしい人は医療関係者ではなく、医療の受け手である一般市民であった。看護学生という、市民と医療者とのいわば「中間的な存在」ともいえる立場での発言の意味についても強調したかった。

学生である応募者の中から同じ学生の立場で、当日の参加者を審査して選出するということについては委員のなかでも意見が分かれた。しかし「学生の手作り」の大会であることをアピールするうえでも委員による審査は妥当だろうということで決着した。

企画書完成後、渉外部や広報部が精力的に活動を始めた。しかし資金繰りは難航を極め、黒岩祐治氏に相談した結果、後援に㈱フジテレビジョンがついてくださった。また、協賛企業の獲得に向けても黒岩氏が大きく貢献してくださった。とくに㈱セコムから大きな資金協力をいただくことができたのはひとえに黒岩氏のおかげであった。そのほか㈱文藝春秋、東和アカデミー看護医療予備校、㈱東和医療機器など各社が協賛してくださった。さらに看護系出版社のご協力や看護学生を支援したいという方、学内の先生方によるたびたびのご寄付のおかげで開催に十分な資金を準備することができた。

広報部や渉外部をはじめ、委員は大学3年生の終わりの春休みを投げ打って活動した。4年生に進級してから開催までの半年間は、病棟実習や就職活動、卒業論文等に取り組まなければならなかったが、それぞれの役割遂行に余念がなかった。仲間の頼もしい勇姿に、筆者は大会の成功を確信した。

大会ポスターは広報部長の手作りであり、文字通り「たまご」型にデフォルメされたナースがたすきをかけてこぶしを突き上げている絵であった。大会のサブタイトル「たまご達の革命」を強く印象づける仕上がりであり当日配布のパンフレットの表紙にもなった（図1参照）。

企画書作成、後援・協賛企業の獲得、会場の決定などひとつずつハードルを越えていた運営であったが、肝心の弁論応募者は締め切り日の段階で5名とさびしい結果であった。開催が危ぶまれたもののじわじわと応募者が増えて、最終的に35名となった。しかし応募者の所属を見て気になったのは、ある学校から、おそらく一クラス分ではないかという多人数の応募があったことだ。筆者



図1 第1回大会ポスター

たちは、学生が「自発的に」応募してくださることを切に望んでいた。ちなみに応募に対して何らかの強制力が働いたのではないかと感じられたため、がっかりしたのだ。とはいえ知名度のない第1回目の大会に35名の方が応募してくださったのはありがたいことだった。看護学生のなかに「語りたい」という熱い思いがあったことの表れとみなすこともできるだろう。それとともに、次に述べるゲストの知名度に拠るところが大きかったのではないかというのが委員の見解だった。ちなみに応募された弁論の内容は、筆者たちが期待したような社会における看護のイメージに対する疑問や看護師問題に対する提言といった内容はきわめて少なく、多くは看護自体のすばらしさや看護を選んだ誇りなどについて語られたものであった。

### 3. ゲストによる講評

第1回大会では、弁論者の発表のなかから優秀賞を選ぶような審査は行わず、優劣はつけないことにした。しかし、ただ発表して終わるというプログラムに物足りなさも感じた。看護学生の発表だけを楽しみに来場される一般の人がどれだけいるのだろうかという不安もあった。できるだけ多くの人に会場に足を運んで聞いてもらいたいという思いで検討を重ね、ゲストをお呼びすることにした。

黒岩祐治氏は、フジテレビの番組終了後に駆けつけてくださることになった。また、当時の聖路加看護大学学長・日野原重明氏には運営当初から大きな期待を寄せて

いただいております。ゲストとして参加いただくことは自然な流れで決定していた。こうして著名なお二方のご協力を得られることになったのだが、講評者としてあと1名、どうしても女性に登壇いただきたかった。「どなたに来ていただくか？」を議論した際のメモが残っている。タレント、女優、医療の専門家など当時の著名人の名前が並んでいる。この議論は非常に盛り上がり、なかなかまとまらなかった。そこで顧問の岩井郁子教授に相談したところ、看護師兼作家として注目されていた宮子あずさ氏を推薦していただいた。すばらしい方を推していただいたと今でも思う。ゲストの方には、無償でご協力をいただいたことを感謝とともに記しておきたい。

### 4. メディアによる取材

広く社会にアピールすることを趣旨に掲げていたので、広報活動にはとくに力を入れた。医療系出版社の反応は上々で、雑誌記事の取材や投稿依頼もあった。しかし私たちがもっとも取材してほしいと願ったのは新聞各紙であった。朝日新聞社からの取材依頼には興奮したものだ。まず朝日新聞本社に出向いてインタビューに応じ、その後聖路加看護大学において運営委員会に取材が入り、活動の様子が写真入りで掲載された。そのほか毎日新聞にも掲載されたことを記憶している。

### 5. 第1回全国看護学生弁論大会の開催

先述の企画書にあるように、大会は一日を通して開かれた。運営委員だけでは手が足りず、クラスメートや後輩たちなど多くの協力者を得た。すべてに手話通訳を入れ、会場受付に障がい者担当を配置した。午前の部では8名が弁論を行い、それに対してゲストから弁論者に対して個別に丁寧な講評が行われた。午後は残る7名が弁論し、同様に講評がなされた。弁論者が所属する養成課程は多様であり、出身地は東北・北陸・関東・中部・四国・九州と広域にわたっていた。テーマは、自身の看護観・看護教育制度への疑問・ICN大会参加体験・看護との出会いなどさまざまであった。

日野原重明氏の講評は主として「弁論技術」という観点からなされ、どのようにしたら良い弁論を行うことができるのかについてご自身の体験を交えて話して下さった。黒岩祐治氏は、マイクをもった瞬間からその道のプロを感じさせるオーラを放っていた。明瞭なよく通る声で、弁論者をたたえ励ます講評をして下さった。聴衆を惹きつける話術がすばらしかった。宮子あずさ氏は優しく気さくな人柄がにじむ、とても味のある講評をして下さった。ときおり混じる看護師としてのユーモラスなエピソードが聴衆の笑いを誘い、会を和やかなものにしてくださった。同時に、看護職としての視点で冴えた分析をして下さった。

当日の会場の模様や運営委員の様子については、黒岩祐治著『ナースたちの朝』<sup>1)</sup>の最終章から引用させていただこう。運営委員会が黒岩氏に相談した当時から大会当日までのことを、あたたかな視点で書いてくださった。

(中略)そして迎えた当日、「報道 2001」の生放送を終えて会場に駆けつけた私はあふれんばかりの客を見て驚いた。四百十人定員の座席はいっぱいであり立ち見が出るほどの盛況ぶりである。しかも要所要所にはきちっとスタッフが配置されており、全体がきわめてスムーズに流れているといった印象であった。

しっかりした進行台本ができあがっていたが、スタッフたちをよく見るとそれ以外にもう一冊倍ほどの厚さの本を抱えている。なんとそれは会場の運営マニュアルであった。スタッフの配置からゲストの対応、出演者の誘導、弁当の手配まで事細かに記されたマニュアルで、イベントのプロが作る物と遜色ない立派さであった。

「黒岩さんが早稲田大学でのエイズのトークショーのお話をなさっていましたよね。それで私たちも早稲田の広告研究会の皆さんにお会いしてこういうマニュアルのことなんかを教えていただいたんです。」

私は彼女たちの行動力に脱帽した。あの最初の頃の頼りなさそうな彼女たちがよくぞここまで成長したものだ。わからないことはわからないなりに、恥をかくことを恐れず、自分たちで直接足を運んで知ろうとし続けたことが彼女たちを大きくしたにちがいないかった。

(中略)大盛会で大成功の内に第一回目の弁論大会は終わろうとしていた。ただ私はこのまま幕が下りてしまうことになにか物足りなさを感じていた。(中略)

「ちょっと聞いてください。みなさんにぜひご紹介したい人たちがいます。運営委員会のみんな、壇上に上がってきて下さい。」

私は全く独断で彼女たち全員を呼んだ。突然のことに驚きながらも三十人近くのスタッフたちが次々と舞台の上へ上がってきた。

「今日の会を企画し作り上げてきたのは彼女たちです。右も左も分からないままのスタートでしたが、こんな立派な会にしてくれました。社会に向けてアピールしたいという思いで企画した弁論大会でしたが、今日のこの大会自体が社会に向けた大きなアピールとなりました。こんな素晴らしい

(感動の場を作ってくれた彼女たちにぜひともみ

なさんの暖かい大きな拍手をお願いします。」

会場からは惜しめない拍手が巻き起こった。大きなことを成し遂げた喜びが込み上げてきたのだろうか、みんな舞台の上で肩を寄せ合って泣き始めた。聴衆の中にも涙にうるんだ顔がたくさん見えた。私も目頭が熱くなっていた。会場全体が大きな感動の渦に包み込まれながら、無事に「たまごたちの革命」第一幕の幕は下りたのであった。<sup>1)</sup>

委員のなかには病棟実習まっただ中の人もいた。大変なプレッシャーであったことだろう。こうして多くの人々の協力を得て大会は終了し、第2回大会の運営委員へ引き継ぐための活動に移った。大会企画当初から引き継ぎを念頭においた活動を始めていたため、すでに数名の方たちが新運営委員として手を挙げてくださっていた。その方たちには大会当日の運営にも参加していただき、引き継ぎはスムーズであった。

### Ⅲ. 第2回～第13回大会：趣向を凝らした大会に成長

以降、筆者は主として聴衆として参加した。よってその立場から報告する。

#### 1. 大会名の変遷

本稿の題目に「HAS 看護学生弁論大会」を採用したが、未開催を含めた計14回の大会名のすべてがこの名称を用いていたわけではない(表1参照)。第1回および第2回大会は「全国看護学生弁論大会」であった。第3回大会よりHAS(Healthcare Association of Student)が主催者名となり、大会名にも反映された。その理由は、第3回大会が弁論の参加対象を看護学生に限定せず、「保健・医療・福祉を学ぶ学生」としたことにあると推測される。その後、第4回・第5回大会でも同様の傾向にあったが、第6回以降はその参加主体を「看護学生」に限定するようになった。その理由として第6回代表の小谷多恵子氏は、「めまぐるしく変化する社会、医療を見つめるためには自分の(つまり「ナースのたまご」の)足元を固めることが重要なのではないかと考えたのです。この大会がそのプロセスとなればと思います」と述べている。<sup>2)</sup>

#### 2. 大会テーマと企画内容の変遷

テーマの設定にあたりどの回の運営委員も議論を重ねたことだろう。1999年11月に開催された第7回大会のテーマは興味深い。「たまご達の提言『看護の未来を考える』～一生ナースを続けますか～」代表の成田一美氏は次のように述べている。

「社会全体が大きく変化している現在、私たちは看護

界の足元だけを見つめていて良いのでしょうか？ そんな疑問をたまご達に投げてみました。とても難しい問いかけです。しかし、学生という自由な今こそイメージを膨らませ、大きく羽ばたく新しいかたちを提言出来るのではないでしょう」<sup>3)</sup>

また、1999年以降、患者取り違え手術などの医療事故が大きく報道されるようになり、医療安全への意識が急速に高まった。その影響を受けているかのように、2000年11月に開かれた第8回大会のテーマは「最近の医療ニュースを見て思うこと」。代表の北浜貴子氏はこのように述べた。

「良いニュースも悪いニュースもありますが、看護職者のたまごとして、看護学生はこれらをどう捉えどうすべきだと考えているのでしょうか？ 様々な医療ニュースを的確に捉え、自由で大胆な『たまご』らしい解釈をして欲しいと思います」<sup>4)</sup>

2001年11月の第9回大会のテーマは「健康に死ぬとは～健康ってなに？～」というもので、看護そのものを取り上げる直球型が多いなかで異色のテーマである。翌年12月に行われた第10回大会では先端医療を取り上げている。看護だけでなく医療全般へ学生の視野が拡大されたことを思わせるテーマである。

プログラム内容にも豊かな変遷が見られる。弁論だけで終えるのではなく、弁論者への質疑応答、ゲストによるシンポジウム、弁論者間のディスカッションなどが盛り込まれるようになった。開催回ごとにいかに趣向を凝らしてきたか、その企画力が発揮された結果である。

黒岩祐治氏は全大会を通して参加された。日野原重明氏は第12回大会のほかはすべて参加された。次に参加回数が多いゲストは計3回の宮子あずさ氏である。他にもテーマに応じてその道に通じたゲストが参加された。いずれのゲストもHAS看護学生弁論大会の意義を深く理解してくださり、会を盛り上げてくださった。第1回大会では行わなかったゲストによる弁論審査も始まり、来場者が参加する審査を行い、表彰する形式へと変化していった。弁論大会を弁論技術やその効果を競う大会として位置づけ、そのことによって弁論の質が高まることを意図して企画されたのではないだろうか。実際、回を重ねるにつれて弁論の質が向上していった。ゲストが大会の講評でそのように述べていたが、聴衆の立場から見ても同様の感想をもった。手持ちの原稿を読むことなく、顔を上げて朗々と明快に弁論する姿が目立ってきたのである。

### 3. 課題となった運営委員数の減少

第8回大会以降のパンフレットに書かれた代表者による挨拶文において次第に目立つようになってきた言葉がある。それは、「運営委員が集まらない」「少人数で運営することになった」といったマンパワー不足に対する悲

鳴である。第8回大会代表の北浜氏は次のように述べた。

「第8回大会運営スタッフ、当初わずか4名という人数からスタートしました。一時は大会を開催できるかという危機的状況に陥りましたが、多くの方々に支えられ、本日こうして皆様と共に第8回大会を迎えることができ、大変嬉しく思います」<sup>4)</sup>

第8回スタッフが引き続き運営に参画して大きく貢献したことが第9回大会パンフレットの黒岩祐治氏のメッセージから伝わる。

「看護学生弁論大会もついに幕を閉じてしまうのかと、今回ばかりは私も覚悟を決めていました。『スタッフが集まらない！』という学生さんの悲鳴のようなメールを受け取り、私にもその危機的状況は伝わっていました。

(中略)でも、これはやらなければならないというような性格のものではなく、あくまで学生さんの有志によって自主的に運営されてきたものです。やりたい人がいなくなった段階で終わるのは自然なことです。それがぎりぎりのところで、去年の実行委員長が2年連続で担当するという離れ業によって、かろうじてつながることになりました」<sup>5)</sup>

一人の委員が複数回の大会運営に参加していたこともあったのだ。1回の大会の運営期間はおおよそ1年前後というところだろうか。2回の大会に参加すると学生生活の半分がそれ以上をこの大会のために費やすことになる。企業等の後援や協賛を得て開催する以上、社会的責任が伴う運営である。学生主体の手作りだからといって、その責任を免れることはできない。学生の肩には荷が重かったことだろう。そのような状況で2年前後にわたり重責を担った委員がいたことが大会継続に大きく貢献したことは特筆に値する。

大会パンフレットの最後に掲載されている運営委員の人数を見てみよう。第1回35名、第4回38名、第5回26名、第6回18名、第7回17名、第8回16名、第9回10名、第10回8名、第11回10名である。第13回は明確に示されていないが編集後記の氏名の総勢は8名となっている(第14回大会については次章参照)。ただし、パンフレット上で運営委員として氏名が掲載されているほかにも何らかのかたちで携わった人がいる可能性もある。また掲載されている人のなかにも病棟実習等のさまざまな理由で運営プロセスのすべてに関与できなかった可能性も(推測の域を出ないものの)想定できよう。運営内容の質は委員数で推し量れるものではないが、時とともに運営に参加する人が減少していったことは事実であった。

## IV. 第14回大会の企画そして終幕へ

### 1. 第14回大会の企画

2006年4月より第14回HAS看護学生弁論大会開催を

企画し始動した。開催日は12月10日と決定し、例年通り聖路加看護大学講堂にて行うこととした。運営委員として活動していたメンバーは、2年生4名、1年生3名（2006年当時）と少ない人員であったが、前年の運営方法を参考にしながら企画準備を進めた。第14回大会のテーマは「LIFE～日々学んでいる中で感じること～」とした。“LIFE”には、①生命、②生活、③生涯、人生、一生、という様々な意味があるため、様々な視点から学生の立場として論じることができると考えられる。よって、“LIFE”を自分の将来・看護にどう生かしていくかを論じ合い、皆で新たな物事の見方を見つけないかという願いを込め、上記のテーマを決定した。ゲストにはHAS発足当初から運営に関して助言や支援をいただいている日野原重明氏、黒岩祐治氏、宮子あずさ氏を迎えることとなり、テーマを踏まえた講演をしていただくことも了解いただいた。協賛に関しては前年同様、多くの企業からいただいた。第14回大会を迎えるにあたって協賛をいただいた企業数は20社であり、大会開催地である聖路加看護大学周辺の飲食店、薬局、ホテル等からも協賛をいただいた。弁論募集の広告は全国の看護大学・短期大学・専門学校等把握できる限りすべての学校に送付し、また、HASの広報活動として、看護ネット・月刊ナーシング・日本看護協会広報誌・e-nurseを通してHASの開催及び弁論募集を呼びかけた。更に、ポスターを作成し、関東近郊の大学・短期大学・専門学校に送付することでHASの存在をたくさんの人々に知ってもらえるよう努めた。

## 2. 第14回大会開催中止までの経緯

当初、2006年9月中旬に弁論の応募を締め切る予定であったが、応募が1通のみであったため9月末まで募集を延長し、そのことを看護ネット・月刊ナーシングに掲載した。また、運営委員の所属大学である聖路加看護大学および日本赤十字看護大学にて、全学生に弁論募集の呼びかけを行った。しかしながら、10月になっても弁論は一向に集まらず、12月10日に開催することは困難となった。よって開催日を1月に延長し、再度呼びかけを行うこととした。しかしそれでも応募者は集まらず、今年度中に開催することは不可能となったため第14回大会を中止せざるを得なくなった。集まらなかった主な要因としては、多くの弁論を応募してくださっていた専門学校の廃校や運営委員不足による情報の周知不足が挙げられると考えられた。

中止にあたり、協賛いただいた企業に協賛金の返金及びお詫び文書を送付し、直接訪問または電話にて更にお詫びをした。また、毎年後援していただいていた(株)日本看護協会・(株)フジテレビジョンへお詫びの文書を送付し、応募をくださった1名には図書券とお詫びの文書の送付、弁論の返却を行った。弁論を募集した学校に関し

ては、大会中止のお知らせを送付し、大会中止文書の掲示をお願いした。

中止に関して、ゲストである黒岩祐治氏からは、来年度の聖路加看護大学文化祭である「白楊祭」で弁論大会を行うという方法もあると提案をいただいた。また、日野原重明氏からは、①時代の流れにより文章のデジタル化が進み、気軽に自分のメッセージを発信できる環境ができたため、あえて弁論を応募しようとする学生が少なくなったのではないかと、②今まで応募数が多かった専門学校の学生数が看護教育の大学への移行とともに減少したことが弁論数減少に大きく関わるのではないかとという趣旨の意見をいただいた。

また、弁論大会を今後解散する場合は、第1回大会から第13回大会の運営委員に連絡をし、了解を得ることを忘れないでほしいという助言をいただいた。よって、今回中止になったこと、及び今後について今まで運営に関わってきた人々とできる限り連絡を取った。

## 3. HAS 弁論大会運営委員会解散までの経緯

第14回大会が中止になった後すぐに第14回大会の学生及び第13回大会運営委員の学生と今後の運営について検討した。話し合いの中で、来年度開催をするという方針で企画をしても弁論が集まるかどうか分からないことや、現在主に運営を行っている人員が5名以下であり運営をしたいという人材が集まらない現状が浮かび上がり、解散を決定した。しかしながら、解散について過去の運営委員と連絡を取るなかで引き継ぎたいと申し出る方が現れたため解散が保留となり、卒業生（運営委員会経験者含む）に引き継ぐかどうかの話し合いを持つことになった。話し合いをするなかで学生だけでは引き継ぐか否かを決定できないと判断し、学生部に助言を求めた。その結果HASは学生が主体として行うものであって、卒業生が行うのはHASの考えに合わないのではないかと、またここで卒業生が引き継いでも今後学生へと引き継ぐことの困難さがあり、継続できない可能性もあることが挙げられた。さまざまな方向から検討した結果、卒業生他への引き継ぎは難しいと考えられたため解散の方向へ再び動くこととなった。解散にあたり、黒岩祐治氏からは、今までいただいていた協賛金の行き先をはっきりさせ、メディアにもわかる形で残すようにとの助言をいただいた。よって、毎年後援をいただいていた日本看護協会に寄付できないかと考えた。しかし日本看護協会からの返答は、寄付という形のものが用意されていないため寄付の行く先をはっきりできない、というものであった。その代わりに財団法人国際看護師協会東京大会記念奨学基金（ICN基金）を紹介していただいた。ICN基金は国内及び国外の看護系大学院等において看護の理論的・実践的研修を受ける看護職員に対する奨

学金として活用される基金である。ICN 基金なら行く先ははっきりしており、かつ看護を学ぶ学生を支援していきたいという HAS の理念に合っていると考えられたため、2007 年 8 月 28 日に日本看護協会にて ICN 基金へ 1,532,891 円を寄付した。寄付の様子は 2007.9.15 発行 Vol. 483 『日本看護協会協会ニュース』に掲載していただいた。更に、聖路加看護大学ホームページに解散の旨と寄付の領収書を掲載し、メディアにもわかる形で残せるように努めた。また、今まで HAS に協賛していただいた企業約 50 社にも文書送付を通して ICN 基金へ寄付したことを伝えた。

HAS は解散したが、今まで運営に携わってきた多くの人が残した資料を整理し、残していくことで HAS をたくさんの人々に知ってもらう必要があると考えた。歴史を残す方法として、学生部から聖路加看護大学大学史編集・資料室検討委員会への資料提出を紹介していただいた。資料整理は第 1 回大会代表である高畠と共に、HAS の発足と解散両方の視点から歴史を残せるよう努めた。

## V. 考察 1：第 14 回大会運営委員の立場から

筆者（芹澤）は HAS 看護学生弁論大会の企画及び解散に携わり、HAS がとても大きなものであったことを強く感じている。大きなものである理由としては、HAS が 1992 年から続いてきた歴史あるものであり、かつ様々な人々の協力を得ているからである。よって、運営委員会で解散をするという話があがってから解散に至るまでに約 1 年、解散の報告に至るまでに 2 年以上かかってしまった。この 2 年間、この大きな HAS を一番良い方法で解散するにはどうしたらよいか悩み、迷い、一進一退の日々であった。しかし、ここまで漕ぎ着けたのは、様々な方の協力、支援があったからであると強く感じている。筆者は HAS を通して、何事も一人ではできず、皆で協力しながら行うことで一つのことが成し遂げられるのだということを実感した。また、学生ではなかなか経験できない企業の方々との交渉、ゲストとの交渉など多くの社会経験を積ませていただいたことに感謝している。

HAS はとても意義のあるものである。なぜなら看護学生の声が社会に発信でき、それを皆で共有できるからである。よって、解散という形をとったことが最善であるかどうかは答えられないと考えている。しかし、今筆者にできることは、今後 HAS のようなものをまた違った形で行いたいと考えている学生に HAS が参考となるようにその歴史を伝え、資料を提供することであると考えている。

## VI. 考察 2：第 1 回大会代表の立場から

第 1 回大会開催の 1993 年から第 14 回大会運営委員会

解散の 2006 年までの 13 年間の日本はどのような社会だったのだろうか。1990 年代後半から急速に展開した IT（Information Technology）化は、携帯電話やパーソナルコンピュータを用いた電子メールの活用を生んだ。本大会の運営面においてもその影響は大きかったことだろう。

（運営委員会発足当初の委員間の連絡手段は固定電話に限定されていた。）いつでも連絡をとりあえる環境がもたらされたことで、所属する学校が異なる状況においても委員会を構成しやすい条件が整っていったのではないだろうか。他方、対面での議論を余儀なくされていた発足当初とは異なり、電子メールを介した連絡が多くなったことで、委員間の意思疎通に思わぬ距離が生じた可能性はなかっただろうか。喧々諤々ではあっても、対面で時空間を共有することで生まれる相互理解があり、それが運営の醍醐味であることを、筆者は大会運営を通して学んでいた。本大会における IT 化の影響は正負両面の効果をもたらした可能性がある。

その他看護に関連する出来事を挙げてみよう。1995 年に淡路・阪神大震災、地下鉄サリン事件、1996 年に初の専門看護師の誕生、1997 年には初の認定看護師が誕生、臓器移植法が施行された。2000 年には介護保険法が施行された<sup>6)</sup>。

1991 年頃より始まったバブル崩壊後の長期不況の影響で、運営資金の調達には次第に困難になっていった。「お金が集まらないんです」という切ない声を運営委員から聞いたことは一度や二度ではない。第 1 回大会では大きな資金提供を受けることができたが、それ以降の運営では厳しい資金繰りを強いられたこともあったようだ。

すでに見たように、大会テーマには社会の動きが反映している。高齢化社会の到来、医療安全意識の昂揚、医療現場における電子化の促進、看護師の離職問題など、看護界は常にめまぐるしい変容を迫られ困難を抱え続けている。そのような状況を運営委員は学生の目線で捉え、考え続けてきた。興味深い点は、運営側と弁論者側相互の、大会テーマに対する思い入れとでもいうようなものに、微妙な温度差が感じられたことである。弁論の内容は、看護・ヘルスケア全般の価値やそれを職業として選択したという自負、ケア対象者への温かな視線など、看護者であれば容易に共感できるだろう内容で語られることが多いように感じられた。運営側が目指してきたのは＜社会＝外＞に向かった弁論であったはずだが、実際の弁論内容は必ずしもそうではなかったという印象を持つ。一般の人にはわかりづらい専門用語を用いた弁論もしばしば聞かれた。＜内輪＞だけで通じる共通言語を用いず、＜社会＝外＞の人々と共に理解しあうための言語で語るといった困難さを認識していたのは、弁論者よりも運営委員のほうであったのではないだろうか。

HAS 看護学生弁論大会は幕を閉じた。それは惜しまれ

るべきことであろうか？ 第 14 回運営委員は終幕を悔やむべきであろうか？

それには、「否」と答えたい。運営中止に至った主な要因は、自由に発言できるインターネットの世界という場の影響と運営委員が集まらないという二点にあると考えられる。しかしこのような傾向は以前の大会から認められていたことであり、第 14 回運営委員が運営中止についての責任を問われてはならないと考える。第 IV 章における終幕場面での委員の取り組みは実に誠実なものである。読者はそこに伴った痛み<sup>あした</sup>に想いを馳せてくださるに違いない。

HAS 看護学生弁論大会の運営は、14 回それぞれの運営委員会が独自に趣向を凝らして行ってきた。14 回、それぞれのやり方で“創めた”のである。何かと成果を問われる社会であるが——「成果とは何か・なぜ求められるのか」という問いはさておき——「成果」は「結果」だけでははかれない。「創める」ことからしか、なにごともし始まらないのだ。筆者はここにこそ本大会の重要な意義があると考え。ゆえに第 14 回大会が未開催となり運営が幕を閉じたことへの批判や自責は妥当ではないのだ。少人数運営や応募者数 1 名という危機的状況に真摯に向き合ってきた第 14 回大会運営のプロセスはむしろ高く評価されるべきことである。大会の開催が運営委員会の成果そのものではなく、運営委員会の営みを「創める」こと自体がすでに成果であるという結論は、HAS 運営委員会の歴史をたどることで導かれたものである。学生が自ら「創める」ことのできる環境を準備するのは、先を歩く看護職であり教育者の任であろう。豊かな土壌を用意して彼らのスタートを応援したい。そのためには、先を歩く筆者たちもまた常に何かを「創める」必要があるのかもしれない。

## VII. おわりに

本稿を記すにあたり、本来ならば各大会の運営委員から当時の運営状況を詳しく聞くべきであったがかなわなかった。過去の大会運営への理解が不十分なままでこのような稿にまとめたことをどうかご了解いただきたい。

学生主体であった一連の運営であるが、支えてくださった方々の存在あってこそ自由に挑戦することができた。大会会場の無償利用を認めてくださった聖路加看護大学理事長日野原重明氏、HAS の解散にあたり様々な支援をしてくださった松谷美和子教授、大久保暢子准教授をはじめとする学生部の方々、畠山小巻氏に深謝したい。毎回欠かさずゲストとして参加してくださったほか、委員の相談に熱心に応じてくださった黒岩祐治氏<sup>あした</sup>の存在なしに 14 回の挑戦はありえなかった。心をこめてお礼を申し上げたい。また、関係教育機関のみなさま、協力企業のみなさま、ICN 財団のみなさま、地域のみなさまをはじめ、本大会を応援してくださった全てのみなさまに深く

感謝を申し上げたい。

ありがとうございました。引き続き、学生の「創める」ことへのご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

## 引用文献

- 1) 黒岩祐治. (1994). ナースたちの朝<sup>あした</sup> (第 1 刷). 201 - 204. 東京：講談社.
- 2) HAS 看護学生弁論大会運営委員会. (1998). 第 6 回看護学生弁論大会パンフレット. 2.
- 3) HAS 看護学生弁論大会運営委員会. (1999). 第 7 回看護学生弁論大会パンフレット. 2.
- 4) HAS 看護学生弁論大会運営委員会. (2000). 第 8 回看護学生弁論大会パンフレット. 2.
- 5) HAS 看護学生弁論大会運営委員会. (2001). 第 9 回看護学生弁論大会パンフレット. 3.
- 6) 「看護史年表」. 週刊医学界新聞. 第 2373 号. 2000 年 1 月 31 日. (2008 年 10 月末時点)  
[http://www.igaku-shoin.co.jp/nwsprr/n2000dir/n2373dir/n2373\\_04.htm](http://www.igaku-shoin.co.jp/nwsprr/n2000dir/n2373dir/n2373_04.htm)

## 参考文献・ホームページ

- 7) 黒岩祐治. 第 16 回～熱い思いを語ってきた「HAS 看護学生弁論大会」. 黒岩祐治の頼むぞ！ナース. e ナース看護師さんのお仕事探し. (2008 年 10 月末時点)  
[http://oshigoto.e-nurse.net/contents\\_kuroiwa.php?no=18](http://oshigoto.e-nurse.net/contents_kuroiwa.php?no=18)
- 8) 日本看護協会. 日本看護協会 協会ニュース. 2007.9.15 発行 Vol. 483.
- 9) HAS. (1996). 第 4 回 HAS 「介護」を考える学生弁論大会パンフレット.
- 10) HAS. (1997). 第 5 回 HAS ヘルスケアを考える学生弁論大会パンフレット.
- 11) HAS 看護学生弁論大会運営委員会. (2002). 第 10 回看護学生弁論大会パンフレット.
- 12) HAS 看護学生弁論大会運営委員会. (2004). 第 11 回看護学生弁論大会パンフレット.
- 13) HAS 看護学生弁論大会運営委員会. (2006). 第 13 回 HAS 看護学生弁論大会パンフレット.
- 14) HAS 看護学生弁論大会ホームページ (第 13 回大会運営委員作成) (2008 年 10 月末時点)  
<http://www.geocities.co.jp/BeautyCare/6186/index.htm>
- 15) 日野原重明. (2003). 夢を実現するチカラ (初版). 東京：扶桑社.
- 16) 財団法人国際看護師協会東京大会記念奨学基金ホームページ (2008 年 10 月末時点)  
<http://www.icn.or.jp/>
- 17) 全国看護学生弁論大会運営委員会企画「全国看護学生弁論大会～たまご達の革命～」ビデオ. (1993). 聖路加看護大学図書館所蔵.